

4. カッセルの中央駅のルネッサンス（文芸復興）

トピック：利用に供されないスペースの文化的な有効活用（ドイツ）

特徴

中心機能を失った中央駅を、主として文化に関連した催し物を開催する空間へと転換を図ることで、駅というスペースを多目的に利用することを可能にし、このことが街の活性化に結びついていること。

<プロジェクトの背景と意義>

ドイツの鉄道会社‘Deutsche Bahn AG’のリストラクチャリング政策として、カッセル（Kassel）市の中央駅は、長距離輸送駅としてのその主要な機能を失った。しかしながら現在では、それに伴って空いた空間が、モデルプロジェクト「‘KulturBahnhof’」の下で、新しいメディアや、映画・美術館・展示会・会議・学会等の文化や、教育、これらに焦点を当てた多機能な活動の利用に供されている。

このプロジェクトは、使われなくなった空間を如何に利用するのがよいかを明確に示し、地方自治体の財政に左右されやすい文化的なプロジェクトが、どのようにして新たに組織されうるのかを実演してみせた。

また、本プロジェクトを通じて中央駅を、右に見たように、主として文化に関連した駅へと転換を図ったことが、EXPO 2000 により転換例の好例として取り上げられ、注目すべきプロジェクトとして認識されてきた。‘KulturBahnhof e. V.’という文化連盟がこのプロジェクトの統括している。

‘KulturBahnhof’の構内は 1997 年には、5 年に一度開かれる「World Exhibition of Art “documenta X”」の会場として利用されたこともあり、現在でも会議、展示会、各種セミナー、夜の催し物といった幅広い活動に用いられる。

<プロジェクトのこれからの展望>

プロジェクト‘KulturBahnhof’はまだ発展の途上にある。例えば、オスカー賞を受賞した Thomas Stellmach 監督の映画製作会社が、同構内を撮影に利用する構えを示している。

‘KulturBahnhof’の創始者は、現ドイツ鉄道委員会の政策の下では、こうしたプロジェクトが一見したところ利益を生み出さないことを理由に廃止に追い込まれる危惧を抱いているが、新たに組織される鉄道委員会がヨーロッパ全体における本モデルプロジェクト「‘KulturBahnhof’」の利点を理解してくれることで、プロジェクトが存続してゆけることを願っている。

・(仮訳)

・(出典)Synthesis Report of the OECD project on Environmentally Sustainable Transport EST presented on occasion of the International est! Conference 4th to 6th October 2000 in Vienna, Austria.